

生活科学への自然地理学的アプローチ (第4報)

—— 日常生活に利用される気候・気象に関する文献 ——

井上啓男・広 正義

An Approach Based on Physical Geography to Domestic Science (IV).

The Literatures Climate and Atmospheric Phenomena Utilized in Daily Life

Hiroo INOUE and Masayoshi HIRO

Abstract

Recently, physical geography (especially climatology) deepens an inter disciplinary with domestic science. As one of the way to know the actual condition, I made investigation into the related literature.

This paper is a kind of bibliography drawn up by such investigation. This work was set ab-
out in 1981 and also investigated in 1986 and 1988.

This time is the forth. In the meanwhile, 356 kinds of books and magazines were selected. Five hundred kinds of publications are aimed at, so this work is kept on. The selected books and magazines were classified and some brief explanations were added.

Under the guidance and suggestion of Prof. Masayoshi Hiro (DSc), Nagoya women's university, this invenstigation has been written.

はじめに

自然地理の主流と考えられる気候(気象も含め、以下同じ)はわれわれの日常生活との密接な関係を深化させている。ことばをかえれば、生活に関する科学上の諸問題との学際的研究の発展とも言えると思う。

最近、国際的な研究機関あるいは国際会議、学識者を通じて、地球の温暖化・酸性雨・オゾン層破壊・パラソル効果・森林破壊と地球砂漠化など、地球的規模で進行している生活環境舞台としての地球クライシスの対応策が呼びかけられているのもその一つであろう。

筆者らは、ほぼ定着したと思われる生活気候(以下生活気象も含めて)の研究が日常生活各分野の生活改善に多少ともどのような役割を果たしているかを知る一つの方法として、日常生活に利用できる文献の収集と文献の検索を行いそれについて3回にわたり報告を行った。(名女大紀要、第27号、第32号、第34号) いづれも、日常生活への利用目的に対応できる文献の所在の確認と生活気候の知識を正確に理解できることに着目した。

本稿は、第3回報告以降の文献収集と文献検索により新たに見出したものについての第4回の文献目録の作成報告である。

文献目録作成の方法

1. 文献目録作成のための文献収集と文献検索は各書店、次の諸機関及び書誌を利用した。名古屋女子大学図書館・日本気象協会東海支部（名古屋市）図書室・三重県立図書館・三重大学図書館・駒沢大学図書館・国立国会図書館文教調査室・1989年版日本図書総目録一書名編一（日本書籍出版協会）・関連図書出版社の総合目録及びパンフレット、リーフ。

2. 収書・文献検索は、戦後刊行の単行本が主であるが、今回より総合雑誌や専門的雑誌（月刊又は増刊号）からの選択も行った。両者については日常生活にかかわる気候知識を得るための教養的文献にどのようなものが所在するかという問いに応えるよう心がけた。

3. 文献収録カードを作成し、収書あるいは文献検索を行った書誌について配列番号・文献名称・著（編）者名・発行（刊）所名・初版発行年度（西暦）・総頁数の順にカード上に記録した後次の分野別に分類整理を行った。

- (1) 生活一般・産業と経済・（経営）・衛生（健康と疾病）・各種レジャーなどを主な対象としているもの。
- (2) 異常気象・気候変動（変化）と日常生活とのかかわりを対象に記述されているもの。
（グローバルな進行が伝えられる地球環境の危機は異常気象・気候変動にかかわりが多いと思われるので、本稿ではこれに関する文献の収集と検索に主力を傾けた）
- (3) 気候（気象）災害とその防災を主に対象としているもの。
- (4) 気候（気象）にかかわる随想・俚諺・歳時記など。
- (5) 気象業務・行政の内状など対象としているもの。
- (6) 気候（気象）・火山と地震や津波（地象と海象）についての基礎的知識の習得を対象としたもの。
（各分野についての意味づけは、すべて前報告で行ったので第二分野を除き省略）

文献目録作成の結果と考察

生活一般・産業と経済・（経営）・衛生（健康と疾病）・各種レジャーなどを主な対象としているもの。

286 気象害から樹木を守る（林業改良普及双書 48）：渡辺資仲・堀内孝雄・高橋喜平：全国林業改良普及協会：1971：211P 干害から樹木を守る。寒さの害から樹木を守る。雪害から樹木を守る。三編を3名の著者が分担執筆している。各気象害発生の原因と条件が記されると共にその防ぎ方に言及し、林業の大規模経営にとって一読の価値がある。

287 医学地理学の諸問題：L. D. STAMP. 今井清一訳：法律文化社：1973：94P 地理学的アプローチが病気の分布や原因の究明にいかに関与するかを明らかにしている。マラリアから気管支炎、ガンまで、気候と病気、気候と健康との関係を様々なレベルから考察し、大気汚染などの公害にまで論究。

288 健康歳時記：神山恵三・田多井吉之介他：有斐閣（新書）：1979：281P 季節の変化と健康設計とは密接な関係があると主張。日常の健康管理、健康づくりの心構えから、病気の知識までを、12ヵ月に分けてわかりやすく解説した全家庭に必備の書。

289 雪国文化誌：市川健夫：日本放送出版協会：1980：266P 世界的深雪地帯といわれる日本海海岸地域の中で、豪雪の猛威とともにたくましく生きる民衆の姿を、実地調査を基に独特

の生活・風土として鮮かに描写している。

290 気象とアレルギー—アレルギーの臨床No.39—：石崎 達・勝呂 宏他：北隆館：1984：36

P 1981年に発刊された月刊誌，“アレルギーの臨床”の特集記事・気象アレルギー・気象と喘息発作・人工気象と喘息発作・大気汚染と喘息・気象と花粉症の4主題が，気象要素や気象変化と関連するアレルギー性疾患の事例として臨床的観点から述べられている。

291 農作物と気象—農業気象通報の手引き(その1.2)—：気象庁：日本気象協会：1985：74×2

P 日本各地の主要農産物の栽培分布，主生産地での代表的生育ステージを図表で示し，各作物の栽培の趨勢と気象条件に注意すべき点を気象シグナルという形でまとめたもの。

292 気候と漁業—気候の変化や水産資源に及ぼす影響—：D. H. Cushing 川崎 健訳：恒星社厚生閣：1986：400P 気象学・海洋生態学・海洋物理学など広範な知識を駆使し，気候変動を引き起す物理的メカニズム，気候変動による海洋環境の変化が水産生物資源に及ぼす影響を歴史的資料を検証しながら，興味深く平易に解説。

293 漁業と気象・海象：桜井邦雄・小野田 仁（漁船保険中央会）：日本気象協会：1987：178

P 漁業関係者が知っておくべき気象の基礎，海上気象情報の種類と取得方法，テレビ・ラジオの関連番組の活用などが内容であるが，海釣り，サーファー等マリンスポーツをする人々にも参考になる書。

294 暮らしの気象学—天気と生活と天気予報—：大塚龍蔵：日本気象協会：1988：236P 日常生活に直結した問題として，天気図・天気現象・天気と生活気象・天気予報の4つに分け，身近なこれらを理解し，積極的に天気を日常生活に利用するために平易に解説。

295 雪と生活：吉野正敏：大明堂：1988：224P 雪と人間生活，積雪地域の特性とその時代的変遷などを中心に，克雪・利雪の時代を迎えた雪国の生活や，社会変動・工業の発展と積雪との関係等，新しい視点から描出。

296 すぐ役立つ山の天気の見方：飯田睦治郎：東京新聞出版局：1988：215P 普通，天気予報は平野部向けの予報で，登山者のための予報ではない，ベテランさえも思いがけない悪天に遭遇し悪条件が一時に襲いかかり，気象遭難が発生する。観天望気・季節と山の天気診断・山の天気俚語など，登山愛好者には有効な書。

297 風と自然—気象学・農業気象学へのいざない—：真木太一：開発社：1989：215P 日本の三大悪風，山谷風，海陸風，やませ風，ボラと空っ風，地表面上の風速分布，目で見る風の形など22章が内容。写真絵図多数で解説も平易，永年にわたる風の研究に関連して，農業と気象の関係が浮き彫りにされている。

298 宮沢清治のウェザーボックス：宮沢清治：毎日新聞社（ムーブックス）：1989：190P 現代ビジネスと天気・ハイテク時代の天気・天気を暮らしに利用する方法・異常気象とこれら等。日本および世界のお天気ひと筋に50年のキャリアが随所に散見される。「宮沢お天気会社」大繁盛という自負には頷ける。

299 NHK暮らしの気候学：大和田道雄：日本放送出版協会：1989：218P NHK名古屋の地域放送番組「暮らしの気候学」が本書の原点。これまで取り上げた話題200回の中から，日常生活のためになる話題50回分を選び出し，身近な暮らしと気候の関係を平易に解説。

異常気象・気候変動（変化）と日常生活とのかかわりを対象に記述されているもの。

300 大気環境の変化と植物：門司正三・内嶋善兵衛：東京大学出版会：1979：199P 大気組成の変化と植物界，大気汚染物質の植物群落への沈着，各種生態系への大気汚染の影響，農作

物への大気汚染害，農業生産に対する気候変動の影響が説明され，各課題は極めて学際的で人類を含むすべての生物群と地球環境との共生に対する愛情と洞察の必要を説く。

301 砂漠化する地球—文明が砂漠をつくる—：清水正元：講談社（ブルーバックスB-390）：1979：240P 発展途上国の人口爆発と併行して進む熱帯林の伐採は，地球砂漠化の拡大にスピードをかけている。砂漠化は異常気候・気象を介しての地球環境破壊であり，日常生活を脅すものである。わが国でも環境による砂漠化は見逃せないと語っている。

302 火山と冷夏物語：H. Stommel・E. Stommel 山越幸江訳：地人書館：1985：238P インドネシアのタンボラ山は1614年，1752年，1815年に噴火した記録が残っているが，1815年のそれは，最大のものと考えられ，この大噴火の影響（パラソル効果）がアメリカ大陸やヨーロッパ（フランス・ロシアなど）のさまざまな情況証拠を浮彫りにしている。

303 核の冬：M. R. Robinson 高榎 堯訳：岩波書店（新書黄版314）：1985：189P もし，核戦争が起れば地球は急速に冷えて（大規模パラソル効果？），氷河時代よりなお寒い“核の冬”が訪れ，人類の絶滅が予測されるという主張。東西両陣営へのショックは無論のこと，人類すべてへの20世紀の黙示録。

304 森が危ない：NHK取材班：日本放送出版協会：1986：214P 開発途上国で進む熱帯林破壊，先進国の深刻な酸性雨による被害，いずれも世界的規模で進む森林破壊，異常気象にかかわる心配な環境問題に，国連・日本の取り組みはどうか，森林保護への道も呼びかける取材記録。

305 異常気象—魔の風・エルニーニョ—：M. H. Glantz・ハイライフ翻訳部：ハイライフ出版：1986：104P 異常気象の遠因として，クローズアップされるエルニーニョを主題とした書。エルニーニョと地域的凶作異変，エルニーニョとのかかわりからよく報道される ENSO 現象とは何か，エルニーニョと異常気象の関係などが主な内容で，エルニーニョ考察の資料として一見の価値がある。

306 知っておきたい異常気象：朝倉 正：大蔵省印刷局：1987：229P 日常生活に直接影響を及ぼす異常気象に対する関心が強まっているなかで，昭和59年（1984年）政府刊行物「異常気象レポート84」が出版されたが，専門的すぎて一般の人に少し難解というアピールがあったので，異常気象のポイントを手短かに解説したもの。1テーマごとに見開きページで，完結するとともに，図や表も豊富で，論議の多い温暖化・酸性雨・オゾン層問題・森林破壊と砂漠化・エルニーニョとテレコネクションなどに及ぶ。必見に値する出色の書。

307 地球に何がおきているか—異常気象いよいよ本番—：根本順吉：筑摩書房（ちくまプリマーブックス）：1987：239P 冷夏・暖冬・豪雪・干ばつなど，世界各地に見られる異常気象の実態を追い，その仕組みを説きながら，本格的となってきた80年代（1980～1987年）を年代別に区別，農業・漁業・政治・経済にどう影響したかを平易に解説。

308 太陽黒点が語る文明史—小氷期と近代の成立—：桜井邦朋：中央公論社（新書845）：1987：179P 1645～1715年，太陽面から黒点が消え去りこの時期地球は小氷河期で，経済活動の停滞，ペストの流行後宗教改革・ルネッサンス・科学革命が進行。両者は因果的にどう関連したのかに着目，古記録・絵画の観察記録から宇宙物理までを総合して，太陽の活動が気候の長期変動を介して文明をもたらすという考えがテーマ。

309 恐るべきフロンガス汚染—ふりそそぐ紫外線の脅威—：泉 邦彦：合同出版：1987：134P フロンガスの生産と使用の実態，オゾンと生命の深いかわり，汚染によるオゾン減少の予測の現状，紫外線の生体影響などを平易に解説し，地球環境問題の一つとしてクローズアップし

ているフロンガスを人類がどのようにして克服すべきかを考える題材を提供している。

310 破壊される熱帯林—森を追われる住民たち—：地球の環境と開発を考える会：岩波書店（ブックレットNo.115）：1988：63P 熱帯林とその価値，熱帯林破壊の原因と影響，保全の現状などについて記述，熱帯林の問題は，事態の深刻さに比し，余りにも無知であるため，知識と理解の必要性を提言．環境問題と教育の世界的な広がりを考えさせる。

311 炭酸ガス—命を支える不思議な物質—：長倉 功：朝日新聞社：1988：222P 世界で初めての〔炭酸ガス〕の本と著者は自負する．人間の生存には炭酸ガスは酸素同様不可欠だが，一般的にその効用は殆ど知られず，むしろ地球温暖化の元凶という印象が強まりつつある．炭酸ガス増加の影響はまだ分らないと主張している．炭酸ガスの役割を功罪両面から平易に説く．

312 地球環境報告：石 弘之：岩波書店（新書新赤版33）：1988：258P 地球生態系の崩壊が，グローバルな範囲で加速度的に進行している．森林の消滅・砂漠化・酸性雨・フロンガスなどが注視の的．世界80か国以上を自ら調査し，最新のデータを織込み傷ついた地球の現状を訴える迫真のルポルタージュ．

313 NHK地球汚染I—大気に異変が起きている—：NHK取材班：日本放送出版協会：1989：235P 本書の内容は，1989年3月19日NHK特集“地球汚染”の第1部「大気に異変が起きている」の制作スタッフが，世界の第一線の科学者たちに取材し，最新の研究成果をまとめたもの．放送は若い人たち，中学生などにも共感をもって受け入れられ，放送後のアピールでは地球環境に関心を向けたといわれている．フロンガスの素顔，増加しすぎた二酸化炭素，動き始めた救済策，地球存続への道などの内容で構成．

314 ワールドウォッチ地球白書—環境危機と人類の選択—：Lester R. Brown 松下和夫訳：ダイヤモンド社：1989：336P 森林破壊とオゾン層の稀薄化，地球の温暖化，大気の質と気候の保護．気候の安定化など，地球環境について将来にわたり，人類が持続的な発展を遂げていくための手段や政策を，極めて具体的な事例の積み重ねをベースとして明確に提案した報告書．

315 フロンガスが地球を破壊する：山田国廣：岩波書店（ブックレットNo.127）：1989：63P オゾン層はどのようにしてできたか，フロンガス増加とオゾン減少，フロンガスとは？，家庭生活に深入するフロンガス，地球レベルで減少のオゾン，地上に降り注ぐ有害な紫外線，フロンガスの温室効果，世界各国・日本の対応と国際的動向，代替技術とはなどフロンガスに関する基礎的知識習得に好適．

316 異常気象レポート89近年における世界の異常気象と気候変動—その実態と見通—(IV)：気象庁：日本気象協会：1989：433P 気象庁は，1973年以来，継続して異常気象・気候変動に関する調査を実施し5年毎にその成果をまとめた報告書を発表している．（政府刊行物）本書は，基本的にはこれまでの報告書の延長線上にある第4回目のものである．異常気象に比べ時間スケールが長く，グローバル的現象である気候変動をより重視している．やや難解の感もあるが，精読すれば有効な書．

317 地球大汚染黙しているのはもう限界だ NASA・ファイルX緊急警告：福岡克也：青春出版社：1989：231P フロンガスは二度と消えない毒物，ガン因子が空から降り注ぐ，酸性雨で死ぬ魚，熱くなる地球に起きる大混乱など，地球的規模の異常気象や気候変動問題は，至るところで論議されるが，いまひとつ身近に感じない人々が多いのでは？という意図から，地球に迫る危機の真実を平易に解明している．

318 熱くなる地球—温暖化が意味する異常気象の不安—：根本順吉：文芸春秋（NESCO BOOKS）：1989：229P 異常気象として現われている地球的規模の地球クライシスは，温室

効果と地球上の生命を保持するガイアを中心とする熱帯林の破壊、生命シェルターであるオゾン層の破壊とが、トータルテーマとして追究されてこそ打開の道が見出されるという提言。

319 気象異常—フロン・酸性雨・森林破壊・温暖化—：山元龍三郎：集英社：1989：237P 最近の、異常気象・気候変動に現れてきた人間活動への影響は、人類の未来に対して楽観できないばかりでなく緊急に何らかの対策を必要とする段階となっているという見地から、日常生活の主役である家庭の主婦のためにを念頭に平易に解説（著者と面談）。

320 オゾン層を守る：環境庁〔オゾン層保護検討会〕：日本放送出版協会：1989：224P 正常な地球環境を次代へ継承させるという意図で、人類文明によって破壊されようとしている紫外線を防ぐオゾン層は、地球のみが保持している貴重なシステムであると強調、オゾン層保護への道を提示。

321 地球・人類・その未来—自然保護への道標—：小島 覚：森北出版：1989：217P 人が自然にどのような影響を与え、自然をどのように変えてきたか、その事例として、砂漠化の進行・CO₂の増加と気候の温暖化、酸性雨と生態系の荒廃を指摘している。記述のなかに、類書に見られない対象地域の具体的な説明があるので、資料としても貴重。

322 恐るべき酸性雨—水と緑を破壊する複合汚染—：谷山鉄郎：合同出版：1989：143P 大気汚染物質が溶け込んだ酸性雨が、森林を枯死させ、水棲（陸水）動物を激滅させている。地球的規模の生態系破壊の実態と被害のメカニズムを平易に解説。

323 地球汚染を解説する—誰が「地球の危機だ」と言ったのか？—：坂田俊文：情報センター出版局：1989：254P 地球環境問題を、画像情報工学（人工衛星からの地球観測）という側面から、情報の読み方と人間の可能性をベースにユニークな説明を行っている。地球汚染と人工衛星・地球汚染の実相・気象で揺れる食糧と気象の戦略などは一読して有効。

324 崩壊する地球と人間（臨時増刊「世界」第530号1989—7）：石 弘之・竹内敬二・根本順吉：岩波書店：1989：58P 月刊誌「世界」臨時増刊号，“新世界を読むキーワード”のなかの第1部。異常気象にかかわるキーワード6事項が集録され本文構成の主要部分となっている。312～314ページのウィーン条約・モントリオール議定書の邦訳はオゾン層保護問題への対応に有効な資料。

325 地球クライシス—今、地球に何がおこっているか？—：竹内 均：教育社：1989：241P 月刊科学雑誌〔ニュートン〕に掲載された、地球環境問題に関係したもの（温暖化・オゾンホール・森林過伐など）を選び出し、問題の現状とそれに対する国際的な取り組みについての記述を新たに付加して編集。地球危機の全貌を把握したいという読者の多数の要望に応えた別冊臨時増刊。

326 地球環境・読本別冊宝島101号：石井慎二編：JICC（ジック）出版局：1980：259P 月刊誌、宝島の別冊臨時増刊号で、編者の意図は、最近の地球環境問題には「間違ったこと」を信じ込まされているものもあるので、危機的状況は否定しないが、語られることすべてが正しいとは言えないし、マスコミ報道などで加速している地球環境問題の根本的理解の取得。異常気象は、160～190ページで、根本・能登・中村の三氏が分担執筆。

気候（気象）災害とその防災を主に対象としているもの。

327 災害論：佐藤武夫・奥田 穰・高橋 裕：勁草書房：1979：349P あらゆる災害の現象を克明に追ひ、災害が生じる構造を自然社会の両側面から詳細に分析、国土の歪みや災害問題の正しい認識が得られる災害学の体系書。

328 地震災害を免れるには：小田原正夫：開発社：1979：234 P 日本で地震のない所,地震計,津波,昔からの地震,プレートテクトニクス,地震予知,地震予知から免れるにはなどが内容,すべてオーラルの形式で記述され,地震理解に好適の書.

329 洞爺丸はなぜ沈んだか：上前淳一郎：文芸春秋：1980：263 P 1954年(昭和29年),台風15号から起きた青函連絡船の沈没事故(タイタニック号沈没に匹敵する)の全貌を,時間の経過を追って克明に再現し,事故の真因にせまるドキュメントで台風国日本の国民にとって,防災の警告書.

330 日本の雪崩—雪崩学へのみち—：高橋喜平：講談社：1980：176 P 雪国のなかで生活し,雪崩の起りそうな雪の状態研究を身をもって行って来た執念が滲んでいる.理論の紹介だけでなく,経験を基に具体的データを駆使して雪崩の実態を説く.

331 地震の事典：萩原尊禮(監修)：三省堂：1983：255 P 第一線の地震研究者の分担執筆.最新の地震学の成果を平易に解説し,防災対策の図解で付加,正確な知識こそ安全への道と力説している.

332 災害の地理学 ケース・スタディで学ぶ日本の実状と対策：守屋喜久夫：講談社(ブルーバックスB-576)：1984：208 P 地震・水害・土砂崩壊・火山災害・自然災害としての火災について,日本のおかれた位置,地質・地形など地理学の立場から検討した書.災害実例をあげて分析,原因をさぐり,対策を明らかにしようと呼びかけた書.

333 地震「第二版」—発生・災害・予知—：浅田 敏：東京大学出版会(U P 選書)：1984：278 P プレートテクトニクスを基調とする立場から,地球の構造・地震の発生・予知・災害等,地震の科学について平易に解説.現在,進行中の東海地震観測,その他心配な地震について,俗説に惑わされない正しい認識が得られる.

334 気象災害の統計—気象庁観測技術資料第50号—(1971~1984)：気象庁：日本気象協会：1986：151 P 過去14年間(1971~1984年)の日本の気象災害について,気象災害年表および統計・図で構成した資料.異常気象を基にとりまとめた.14年間約650の年表が,災害名・発生起日と地域・被害および概況に区分し整理してある.

335 豪雨災害に備える—防災情報・予報技術を中心として—：科学技術庁資源調査会：大蔵省印刷局：1986：213 P 雨量・水位や大雨に関する予・警報などの豪雨に関する情報や豪雨による災害の発生を予測する技術について調査したもの,豪雨防災情報の伝達システム・情報の内容と活用・住民の対応・避難行動などが主な内容.

336 日本の危険地帯—地震と津波—：力武常次：新潮社(選書)：1988：266 P 日本のどこが危いか?地震予知に確率に基づく定量的判断を導入して日本各地の地震・津波の危険度マップを作成し紹介.

337 火山と人生：南日本新聞火山取材班：岩波書店：1989：364 P 火山は日常生活を脅かす一方で,地熱エネルギー・温泉などの恩恵をも与えてくれるという基調から,火山とともに生きる人々の暮らしを,日本全国と世界各地に取材,火山のあらゆる側面にアプローチして火山との共生の道を探求.

338 複合大噴火—1783夏—：上前淳一郎：文芸春秋：1989：277 P 異常気象下にあった1783年夏,浅間山とラキ山(氷州)が大噴火,火山灰は世界を覆い各地に気候の異変が発生,わが国の天明飢饉,フランス革命はこれが遠因と,自然現象が社会に与える影響(パラソル効果の復元的推測)を探るノンフィクション.

気候 (気象) にかかわる随想・俚諺・歳時記など

- 339 人生天気図曇りのち晴れ：倉嶋 厚：桐原書店：1987：239 P** 気象の現業歴40年余の著者が、この間に新聞、雑誌などに書いた文章や講演録などから、アレンジしたもの、印象に残るのは、情報化時代の天気予報の一つとして個別的な情報の必要性を民間の天気会社への投資効果という観点で述べていること。経済気象学という新視点の提供。
- 340 お天気博士の四季だより：倉嶋 厚：講談社 (文庫く13-12)：1988：254 P** 1986年、87年の読売新聞朝刊のコラム“家庭とくらし”欄と、同新聞にそれ以前に書いたコラムの中の若干の項目を付加し季節別に配列したもの。長年月の執筆感想の一端を述べているが、蘊蓄を傾け、みずみずしく表現し“生活が豊かになる”季節のエッセイ。
- 341 日本の四季—風のたより雲のふみ—：倉嶋 厚：朝日出版社：1988：222 P** 1984年から、継続中の朝日新聞夕刊のコラム“お天気衛生”をまとめたもの。1月から12月までの月別に気象にかかわる諸現象の専門的な見解を一般向きに平易に語りかけてくる。日常生活にまつわる気象関連用語を知る出色の手引き書。
- 342 季節：安藤隆夫：創拓社：1988：230 P** 日本の風土を伝えることわざ、いいかえればことばの民俗学。陽気の移ろい、晴れ・雨・雪・風・台風の天気予知、四季変化など季節の俚諺集。俚諺にはその地方の特殊な面白さがあり、局地気候的な価値は失われないように思うと強調しつつ気象に興味をもつ人が増えることを願っている。
- 343 空からの手紙—気象を見る眼—：根本順吉：筑摩書房 (文庫420)：1989：272 P** 日本で気候変動にいち早く着目した著者が1983年に、茶道普及誌“なごみ”に書名のように、主として大気現象の解説をしたものに気象観察の手引きとなる若干の文章を付加している。なにがしかの気象知識を身につけることで、気象の見方がいくらかでもちがってくるようなことを、季節を追って書きつづけた書。

気象業務・行政の内状など対象としているもの

- 344 天気予報はどうなっているか：全気象労働組合：大月書店：1988：236 P** 日常の生活から、政治経済への動きにも影響を与える天候をどう的確に予知するのか。全国各地で観測・予報業務を担う人々が、仕事のしくみと実情をとおして、天気予報の現在の到達点を明らかにし、そのあり方を探った書。

気候 (気象)・火山と地震や津波 (地象と海象) についての基礎的知識の習得を対象としたもの

- 345 お天気の科学—天気図づくりから予報まで—：一色 明：文泉：1982：229 P** 入門的な書ではあるが、1970年～1979年10年間の天気図約3,700枚を分類整理してわり出した1月～12月の月別天気分析は、日常生活への利活用に便利。新聞天気図やテレビの天気図だけ見ている人に参考になる。
- 346 はじめての生活天気学Q & A：大塚龍蔵：芸文社：1987：144 P** 人々の生活に結びついた気象現象に重点をおいて自然現象である天気の多様性を理解できるよう平易に記述。天気を日常生活や産業活動に利用しようという一般の人々が、自分なりに天気予報の利用を工夫するための伴侶となることを意図した書。四季の気象博物誌。よくわかる天気図と天気予報・生活天気学実用応用術などを主題としている。

- 347 予報用語及び文章—予報作業指針資料その14—：気象庁予報部：日本気象協会：1987：109 P** 初版刊行(1966年)以来20年余にわたり、日常の予報作業に活用された本書も新しい気象観測システムの導入、予報技術の進歩、情報提供方式の改善等が行われたことから予報用語(初版)の見直しや追加が必要となったため、気象庁及び地方中枢官署等の意見にも配慮し、改訂版(1987年8月より改正)として発刊。収録は予報用語、天気予報における表現等である。
- 348 明日の天気がわかる本—天気図の読み方作り方—中村 繁：新星出版社：1988：222 P** 天気図を見ることから、読むことへ前進してほしいというのが著者の意図。日常生活やレジャーを一層楽しんでもらうことも天気図の読解が有効と述べている。内容、気象と商売というコラムがあり、日常の経済生活と気候・気象とのかかわりが明解。
- 349 新・天気図の書き方と見方：予報技術研究会編著：恒星社厚生閣：1986：160 P** 最近、天気予報には種々の新しい情報が取入れられているので、これら新情報を正しく理解し、特に正しい天気図の作り方や、テレビ・ラジオの天気予報の聞き方、ひまわり・アメダスの解説など日常生活への活用に便利な書。
- 350 気象のはなし I：光田 寧：技報堂出版：1988：254 P** 身近で、日常よく見受けられる気象現象をテーマに、専門家のとっておきの話を集めた書。気象現象の基礎となる原理や法則との関係を知るのがねらいの教養書。第1巻の内容は、大気のみかニズム・数値予報の限界・台風の統計的性質・盆地はなぜ暑くて寒い・気象資源など38項目。
- 351 気象のはなし II：光田 寧：技報堂出版：1988：246 P** 第1巻に続く37項目を収録。主な内容は、地球をめぐる風・雲の誕生・集中豪雨では、なぜたくさんの水が?、風雨寒暑のしるぎ方・園芸と気象・生活と気象など。
- 352 気象をはかる：小林壽太郎：日本規格協会：1988：140 P** 現在用いられている気象・気候現象の計測や数値予報の計算モデルの内容仔細は専門性に傾くので、日常生活の中から「はかる」行為を通じて抽出した情報が人々の社会・経済活動にどのように寄与しているのか、課題は何かなど、大気が送ってくる情報解読の必要なよりどころに焦点を置いている。
- 353 風の世界：吉野正敏：東京大学出版会：1989：224 P** 風と人間生活との深いかかわり(民俗・文化の一面までも)や、日本の四季を特徴づける風、複雑な地形に起因する局地風・世界の季節風など、大気の循環のミクロからマクロスケールまでの風の世界が興味深く書かれてある。風の民俗学・都市の風・風と災害の内容は、風の研究歴40年の著者が光彩を放っている。
- 354 明日の天気の読み方—これで、あなたも「お天気博士」—：服部敦子：ごま書房：1989：209 P** 日常生活では、明日の天気を知る必要に迫られることがよくある。各地方の天気を簡単に知る天気グッズの出現もそれに応えるものであるが、自分なりの物差しで明日の天気を読むという女性特有の流麗な文体の天気予報経験談。
- 355 農業気象学用語集：日本農業気象学会：養賢堂：1980：116 P** 気億・栽培・生態・施設・土木等を含む農業気象用語、和・英併せて約4500語が収められている。基本用語のほか合成用語、主要略語も多く、農業気象の必備用語集。
- 356 気象の常識 (DSライブラリー)：松本誠一：電気書院：1989：128 P** 気象学の発展と先端技術と題したオーラル形式の内容が印象的、スーパーコンピューターの導入で数値予報・数値シミュレーションが出現し、長期予報の可能性が向上しているなかで、気象業務のOA化の理解を平易に説明しているのが出色。

あ と が き

生活科学の諸分野が気候・気象とどのように学際性を発展させているかを知る一つの方法として、収書と文献検策を行ない、関連の文献が日常生活のなかで有効に利活用できるよう知識の習得やその対応にも着目した一種の文献目録である。

本稿は、第1報 (名古屋女子大学紀要, 第27号, 1981), 第2報 (名古屋女子大学紀要, 第32号, 1986), 第3報 (名古屋女子大学紀要, 第34号, 1988) につづく第4回目の文献目録作成報告である。

日常生活のなかで、利活用に有効となるよう着目しながら71種類の単行本と雑誌を選択し、次の6分野に分類・整理してある。

- (1) 生活一般・産業と経済 (経営)・衛生 (健康と疾病)・各種レジャー等を主に対象としている文献。
- (2) 異常気象・気候変動と日常生活とのかかわりが対象の文献。
- (3) 気候災害 (気象災害)・地象災害 (火山・地震) とその防災を主な対象の文献。
- (4) 気候・気象に関する随想・俚諺・歳時記など。
- (5) 気象業務と行政の内状が対象の文献。
- (6) 気候・気象・地象 (火山・地震) の基礎的知識習得に有効な文献。

文 献

- 1) 石田竜次郎, 吉野正敏: 地理学研究のための文献と解題, 51~64, 古今書院 (1969)
- 2) 大矢雅彦: 地理, 25・第1号, 19~27 (1980)
- 3) 谷治正孝: 地理, 32・第3号, 88 (1987)
- 4) 谷治正孝: 地理, 32・第5号, 102~105 (1987)
- 5) 井上啓男, 広 正義: 名古屋女子大学紀要, 27, 255~265 (1981)
- 6) 井上啓男, 広 正義: 名古屋女子大学紀要, 32, 99~109 (1986)
- 7) 井上啓男, 広 正義: 名古屋女子大学紀要, 34, 155~165 (1988)
- 8) 関根勇八, 酒井俊二: 気象情報の利用—新しい応用気象学—, 20~34, 東京堂 (1987)
- 9) 日本書籍出版協会: 89年版日本書籍総目録 (書名編), 日本書籍出版協会 (1989)